

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：44523

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00293

研究課題名(和文) 近世仏教説話集の知的基盤についての研究 - 寺院所蔵の出版物及び聖教との関わりから -

研究課題名(英文) A study on the intellectual foundation of Buddhist narratives in the Edo period from the viewpoint of publications and manuscripts held by temples

研究代表者

山崎 淳 (YAMAZAKI, Jun)

武庫川女子大学短期大学部・日本語文化学科・教授

研究者番号：20467517

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大阪府河内長野市の地蔵寺を中心にいくつかの寺院の所蔵文献(出版物と写本)を調査し、分析を進めた。特に地蔵寺では、これまで詳しく調査されていなかった写本群を対象とした。その結果、これまではなかなか見えてこなかった広範囲に及ぶ人的、物的なネットワークが明らかになってきた。また、決して規模の大きくはない地方の寺院においても、僧侶の交流や知的基盤を示す資料が数多く伝えられているということを従来より明確に示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地方の小規模な寺院は、所蔵文献の整理・調査が進んでいないことが多く、どのような資料が存在し、それらがどのような意味を持つのかということも不明瞭であると言える。地蔵寺の文献資料は、そういった寺院がかつて有していた役割というものが決して小さくなかったことを示すのに有益なサンプルであると位置づけることができる。また、比較的時代が新しい近世の資料であっても、精査することにより、たとえば諸本の研究に資するような存在となり、価値をより高めていけるということを本研究では提示できたと考える。

研究成果の概要(英文)：I examined and analyzed documents(publications and manuscripts) held by several temples, mainly Jizo-ji Temple in Kawachinagano City, Osaka Prefecture. At Jizo-ji Temple, I focused on a group of manuscripts that had not been investigated in detail until now. As a result, a wide-ranging human and material network that had been difficult to see until now is gradually becoming clear. It is also becoming clearer than ever that even in regional temples that are not large, many documents remain that show the interactions and intellectual foundations of monks.

研究分野：日本文学

キーワード：寺院所蔵資料 真言密教 新安祥寺流 新安祥寺流 蓮体 浄厳 出版 近世仏教説話集

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 九華山地蔵寺(現大阪府河内長野市。以下、地蔵寺)所蔵文献については、大正期の行武善胤、昭和30年代の信多純一、昭和40年代の上田霊城らによる調査がある。その成果は『靈雲叢書解題』『国書総目録』『河内長野市史』などに反映されているが、その後は目立った調査が行われておらず、所蔵文献の多くは、その内容や価値などを知られることがないままであった。特に本研究開始時では、写本を中心とする地蔵寺の聖教については、ほとんど知られていない状況だった。本研究や報告者のこれまでの研究(2)参照)は、上記の調査を継ぐものであるとともに、詳しい書誌情報や写真撮影を伴った初めての悉皆調査である。

(2) 報告者は、これまでに以下の研究課題において、蓮体の著作並びに地蔵寺所蔵文献の調査・分析を進め、その成果を公にしていた。

平成20~22年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「近世仏教説話集と寺院所蔵文献に関する研究 蓮体の著作と河内地蔵寺を中心に」(課題番号:20520163)

平成23~25年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)「真言密教寺院の所蔵文献と近世前中期の説話文学に関する研究 地蔵寺を中心として」(課題番号:23520246)

平成26~29年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)基盤研究(C)(課題番号:26370248)

これらの研究において、地蔵寺所蔵の版本については大部分(約9割)を調査することができた。これには地蔵寺所蔵の目録カードが大いに役立ったが、先行研究を見ると、この目録カードに見当たらない文献への言及がある。それらについては当初その存在が確認できなかったため、調査が版本中心になったのは自然の成り行きだった。ところが、この終盤にご住職から、相当量の写本(以下、聖教)が見つかったことを教えていただいた。いくつかを簡単に確認したところ、先行研究で言及されていたものに該当することが判明した。これらは版本と異なり、番号などは付されておらず、まとまった紹介もされていなかった。蓮体の布教活動、著述活動を考える際には、版本だけでなく、これら聖教も当然視野に入れる必要があった。

2. 研究の目的

本研究では、近世の仏教説話集がどのような学問的環境や知識体系のもとに形成されていったのか、あるいは近世の仏教説話集編者がどのような知的基盤を有していたのかという問題を、寺院所蔵文献の分析を通し解明することを目的とする。寺院に所蔵される古代・中世の文献の希少価値が大きいことは言うまでもないが、近世文献の価値はそれ以外のところにある。きわめて多くの数量が残存しているからこそ、寺院の学問的環境、僧侶の知識体系を解明するための適切な材料となる。特に地蔵寺開基の真言僧・蓮体(1663~1726)は、地蔵説話集『礪石集』、観音説話集『観音冥応集』などをものしており、その蓮体の蔵書が多く残されている地蔵寺所蔵文献は、蓮体の布教活動、著述活動を支えていた知的基盤に直結する存在と言える。

そこで本研究では、上記の目的のために、より具体的に次の5つの目標を掲げた。

(1) 地蔵寺の新出聖教箱の内実の解明

新出の地蔵寺聖教は大正期にいくつかの束にまとめられたらしく、それ以来全体的な調査が行われた形跡がない。これらを1点ずつに分けて仮番号を付し、書誌情報を記述することが基礎的な作業となる。この作業により、聖教がどのような内容を持つものなのか、蓮体関連書がどれくらい含まれているのかを明らかにする。

(2) 地蔵寺所蔵文献の全体像の把握

(1)において得られた結果を、それまでに進めていた既存の文献の調査結果と統合し、地蔵寺所蔵文献の全体像の把握を目指す。これは、地蔵寺所蔵文献がどのような歴史を経て今日の形となったのかを明らかにすることにも直結する。同時に元来の形にどこまで復元可能なのかという点に対しても有益であると言える。

(3) 地蔵寺における各文献の関連の解明

版本、写本を問わず、文献同士に関連がないか否か、あるとすればどのような関連を持つのかを明らかにする。仏教説話集を始めとする蓮体の著作とそれ以外の文献との重なりには特に注意を払い精査する。

(4) 各寺院間の文献の関連の解明

地蔵寺と他寺院間で所蔵文献に関連がないかを確認する。たとえば、奥書・識語の重なり、書き入れの重なり、装丁の重なり(蓮体に直接関連する書物は表紙の色や署名に特徴がある)などである。その上で書物・人物の移動・交流の時期や経路を明らかにする。

(5) 地蔵寺所蔵版本の意義づけ

地蔵寺所蔵文献の版本については約9割の調査が済んでいることは上述の通りだが、蓮体の書き入れを含めて精査することで、改めてこれらの資料の意義を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 地蔵寺所蔵文献の悉皆調査: 調査の中心となる地蔵寺には、版本を中心とする文献を収めた

49箱、新たに見つかった写本を中心とする約30箱が存在する(なお、後者では箱の大きさが一定していない)。前者の49箱については上述のように目録カードが存在する。ただし、作成から年数が経過しており、その内容も基本的に整理番号と書名からなる簡単なものであり、その目録に載せられていない文献(第1箱の分)や『秘密儀軌』のように数量が多いのにもかかわらず箱番号が付されたのみというものも存在する。そこで、前者(版本中心の箱)に関しては目録カードと現存文献との照合ならびに整理(番号付与も含む)、後者(写本中心)に関しては全点に整理番号がないため新たに番号を付与し、その上で現存文献全体の詳細な書誌調査を進める。同時に重要と認められる文献の撮影を行う。

(2)地蔵寺以外の蓮体関連寺院の文献調査：地蔵寺所蔵文献に名前の見えた寺院、あるいは蓮体や浄厳(蓮体の師・血縁では叔父)と関係のあった寺院の文献も並行して調査する。主に対象とするのは、本研究課題の研究協力者である中山一磨(大阪大学招へい研究員)が研究代表者として調査を進め、報告者も調査に参加している覚城院(香川県三豊市)と安住院(岡山県岡山市)である。これらの寺院では、蓮体・浄厳関係の文献とともに、版本を軸とした調査も行う。

(3)データ入力：書誌を記入した調書の情報をパソコンに入力し、データベース化を行う。本作業はこれまでの研究課題からの継続であり、新規の調査情報を加えていくとともに、目録としての体裁の整備に努める。なお、浄厳・蓮体に関わる聖教類に関しては、スピードアップを図るため、紙の調書での作成は省略し、調査とパソコン入力を並行して行う形にする。

(4)成果の外部への公表：以上の調査・作業を踏まえ、重要と認められる作品の精読・分析を行い、その成果を学会・学術雑誌等に発表する。

4. 研究成果

(1)書物に捺された印記は、たとえその書物に署名や書き入れなどがなくても、その印の所持者が書物の所持者であった可能性を強く示唆する。もちろん書物の印記は寺院所蔵文献に限ったことではないが、地蔵寺所蔵文献に見える印記を「蔵書印データベース」(国文学研究資料館、後に人文情報学研究所)で検索すると、重なるものがほとんどないことが判明した。この点を踏まえ寺院所蔵文献の印記の意義を論じたのが、『寺院文献資料学の新展開 第9巻 近世仏教資料の諸相』所収「寺院所蔵文献における印記について 地蔵寺所蔵文献から」である。当該論考では、印記に関して、これまでの諸機関における蓄積にさらなる上乘せが可能であることを寺院所蔵文献に期待できることをまず提示した。また、同論考では、蓮体の印記10種、浄厳の印記3種を紹介した。今後、蓮体もしくは浄厳に関係する文献資料かどうかを判断する一つの材料になることが期待できる。さらに、複数の寺に同じ印記がある例も指摘した(ただし、蓮体・浄厳のものではない)。具体的には金剛寺(河内長野市)と覚城院の文献資料に、地蔵寺と同一の印記が見出せた。現時点で、時期や経路は特定できていないが、今後このような事例が増えれば、寺院間における人や書物の動きを明らかにする強力なツールとなるだろう。

(2)新出の地蔵寺所蔵文献(写本)にどのような位置づけが可能か、具体的に示したのが、『寺院文献資料学の新展開 第1巻 覚城院資料の調査と研究』所収「覚城院所蔵文献と地蔵寺所蔵文献 蓮体を起点として」である。地蔵寺蔵『アン(梵字)諸大事』(蓮体自筆奥書あり)が、覚城院蔵『アン(梵字)流諸大事』の親本のような存在(直接関係があるかどうかは不明)であり、覚城院の本文は地蔵寺本において書き入れ(朱)によって訂正された後の形になっていること、覚城院の奥書における脱落を地蔵寺本で補えることなどを指摘した。なお、新出の聖教のうち、特に蓮体・浄厳関係聖教については、奥書・法量などの書誌事項のデータ入力をほぼ済ませている。

(3)蓮体関係聖教は、地蔵寺と延命寺(河内長野市。蓮体は二代目住持)に存在することが知られていたが、それ以外に報告はなかった。本研究においては、上記2寺以外にも存在することが明らかになった。それを報告したのが前述「覚城院所蔵文献と地蔵寺所蔵文献 蓮体を起点として」である。すなわち覚城院所蔵文献の中に、蓮体自筆本1点(表紙見返しに蓮体の署名)、蓮体所持本1点(表紙に蓮体の署名。末尾に蓮体自筆と認定できる書き入れあり)の存在が確認できたのである。なお、上記論考発表後、蓮体所持本については、地蔵寺聖教の調査が進む中で蓮体が弟子に写させた、いわゆる令写本であることが判明した(弟子が具体的に誰かもほぼ認定可能)。覚城院に入ったいきさつは現時点では不明だが、この成果は、今後も寺外に關係聖教が発見される可能性を示唆しており、寺院間の人やモノの動きを考える際に有益な材料となることが期待できる。

(4)本研究で目的の一つに挙げていたのが版本の精査である。地蔵寺所蔵文献の版本に特異な版があることは、「地蔵寺蔵『本朝孝子伝』の本文」(『上方文藝研究』10号 2013.6)ですでに指摘したことがあるが、本研究において新たにそのような存在を見出せた。『地蔵菩薩靈驗記』(諸版いずれも貞享元年[1684]の刊記を持つ)である。当該作品は、蓮体が經典講義の場で種本として大いに活用していたものの一つである。その観点から、改めて地蔵寺蔵『地蔵菩薩靈驗記』を精査したところ、これまでに見つかっていなかった版であり、初版に次ぐ版である可能性が高いこと、蓮体の書き入れから刊行時期が元禄七年(1694)以前であることが判明した。この点を指摘したのが、「九華山地蔵寺蔵『地蔵菩薩靈驗記』の位置」である。本論考は、寺院所蔵版本の価値をより高める試みであり、また当時の僧侶が、刊行早期の段階で自身の布教活動や説話集編纂の基盤となる書籍を入手していた可能性を提示したものである。なお、寺院所蔵文献に特異な伝本が存在する例は、『寺院文献資料学の新展開 第4巻 安住院資料の調査と研究』所収「安

住院蔵『西行物語絵巻』の特色「附、翻刻」でも報告した。

(5)本研究において、当初予想していなかった成果は、新安祥寺流の広範囲の伝播をうかがえる資料群の存在を確認できたことである（新安祥寺流は、浄厳を祖とする真言密教の流派）。前述の版本を中心とした49箱と写本を中心とした新出の聖教とを照らし合わせながら調査していくと、延命寺や地藏寺などで蓮体から印可や灌頂を受けた僧や尼、500名近くの情報を得ることができた。近辺の河内や和泉、蓮体がしばしば訪れた讃岐や備前が多いのは当然として、石見や出雲から来た者が目立つことは興味深い点である。数は少ないとはいえ東は下野、西は豊後からの者もいた。また、印可や灌頂の年月日のみならず、僧や尼の本名・仮名、居住地や所属寺院も、全員ではないとはいえ把握できるようになった。これらの細かい分析についてはこれからの課題となるが、蓮体の人的・物的ネットワークや説話の収集ルートを考えていく上で、有益な情報をもたらすことが期待される。そして、今後の寺院調査において、地方へ伝播した新安祥寺流という観点が必要な研究対象の開拓につながっていく可能性も期待していただろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山崎淳	4. 巻 141
2. 論文標題 真言宗寺院の黄檗派関係文献	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 黄檗文華	6. 最初と最後の頁 29-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎淳	4. 巻 45
2. 論文標題 覚城院聖教調査と新安祥寺流 四国での伝播解明に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 仏教文学	6. 最初と最後の頁 63-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎淳	4. 巻 20
2. 論文標題 九華山地蔵寺蔵『地藏菩薩靈驗記』の位置	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 上方文藝研究	6. 最初と最後の頁 54 - 60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 山崎淳
2. 発表標題 安住院蔵『西行物語絵巻』について その本文と絵と独自異文をめぐって
3. 学会等名 大阪大学古代中世文学研究会・寺院資料調査研究報告 合同特別例会「知られざる古筆・断簡と寺院経蔵 瓶井山禅光寺安住院」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎淳
2. 発表標題 寛城院聖教調査と新安祥寺流 四国での伝播解明に向けて
3. 学会等名 仏教文学会 4月例会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 近本謙介（編）阿部泰郎、猪瀬千尋、山野龍太郎、三好俊徳、任占鵬、近本謙介、富島義幸、阿部美香、郭佳寧、野呂靖、西谷功、大谷由香、泉武夫、黒田彰、荒見泰史、橋本遼太、海野圭介、ラポー・ガエタン、高橋悠介、松尾恒一、松山由布子、山崎淳、程永超	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 544
3. 書名 ことば・ほとけ・図像の交響	

1. 著者名 中山一麿（監・編）、海野圭介、松本大、小林理正、飯田実花、川淵紗佳、山崎淳、森俊弘、中田利枝子、落合博志、須藤茂樹、森實久美子、郷司泰仁、木下佳美	4. 発行年 2022年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 621
3. 書名 寺院文献資料学の新展開 第四巻 安住院資料の調査と研究	

1. 著者名 山崎淳（編）、渡辺麻里子、川端咲子、林久美子、須藤茂樹、向村九音、藤巻和宏、中山一麿、有瀬光崇、中前正志、本井牧子、木下智雄	4. 発行年 2020年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 504
3. 書名 寺院文献資料学の新展開 第九巻 近世仏教資料の諸相	

1. 著者名 中山一麿（編）、川崎剛志、牧野和夫、落合博志、高橋悠介、平川恵実子、山崎淳、柏原康人、鈴木英之、幾浦裕之、伊藤聡、木下佳美、向村九音	4. 発行年 2019年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 445
3. 書名 寺院文献資料学の新展開 第一巻 寛城院資料の調査と研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中山 一麿 (NAKAYAMA Kazumaro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------